

令和5年度  
奈良県立大学附属高等学校  
入学者一般選抜検査問題

# 国語

## 注意事項

- 1 指示があるまで、この冊子を開いてはいけません。
- 2 答えは全て解答用紙の解答記入欄にマークしてください。例えば、

10
----

と表示のある問いに③と解答する場合は、次の(例)のように解答番号10の解答記入欄の③にマークしてください。

(例)

解答番号	解答記入欄
10	① ② ● ④ ⑤ ⑥ ⑦ ⑧ ⑨ ⑩

- 3 印刷ミスなどがあれば、静かに手を挙げて監督の先生に知らせてください。  
問題内容についての質問には答えられません。
- 4 不正行為は絶対にしないようにしてください。



次の各問いに答えなさい。

(一) 次の(ア)、(イ)の文中の〳〵について、漢字はその読み方として最も適切なものを、カタカナは漢字に直したときに最も適切なものを、それぞれの①～⑤から一つずつ選び、その数字を、(ア)は解答番号 **1** に、(イ)は解答番号 **2** にマークしなさい。

(ア) かばんを提<sup>ひ</sup>げて立っているのが私の弟です。

- ① さ ② かか ③ ささ ④ もた ⑤ ひろ

(イ) 祖父はシヨウコウ状態を保ったまま眠っていた。

- ① 昇降 ② 将校 ③ 商工 ④ 小考 ⑤ 小康

(二) 次の文の( )にあてはまる漢字として最も適切なものを、後の①～⑤から一つ選び、その数字を解答番号 **3** にマークしなさい。  
 ・夜遅くまで練習したせいで体を壊し、本番で実力が発揮できないとは本末( )だ。

- ① 逆転 ② 反転 ③ 暗転 ④ 転倒 ⑤ 転落

(三) 次の文の( )にあてはまる言葉として最も適切なものを、後の①～⑤から一つ選び、その数字を解答番号 **4** にマークしなさい。  
 ・山頂から見た日の出は、思わず息を( )美しさだった。

- ① つく ② のむ ③ 吸う ④ 抜く ⑤ 切る

(四) 次の文の〳〵の動詞の活用の種類と活用形の説明として最も適切なものを、後の①～⑤から一つ選び、その数字を解答番号 **5** にマークしなさい。

・草野球の試合をするために、メンバーを集<sup>あ</sup>めている。

- ① 五段活用で連用形である。  
 ② 上一段活用で未然形である。  
 ③ 下一段活用で未然形である。  
 ④ 上一段活用で連用形である。  
 ⑤ 下一段活用で連用形である。

次の文章を読み、各問いに答えなさい。

道を歩いているときに、ふと道端の小さな花に目がとまることあります。先日、目がとまった花は、真冬なのに咲き始めているホトケノザの紅色の花と、はこべの白い花でした。私は田舎で百姓をしているので、ほとんどが見慣れた草で、ありふれた草です。それでも、時々は「きれいだ」と感じる時があります。しかし、そこで立ち止まることもなく、そのまま通り過ぎていきます。そして、数分経つと、もう先ほど目にとまった花のことなどすっかり忘れていきます。したがって「田んぼへの道を歩くのは楽しい。野の花に目がとまるから」などと思うこともなく、まして誰かに話すこともありません。

しかし、あらためてふりかえると、ふと目をとめていた草は、全部名前を知っている草ばかりです。目新しい名前を知らない草なら、むしろ立ち止まってよく見るはずです。「なぜ、ここに生えているのか」と問いつめたい感じです。

ところで、いつも通るこの田舎道は果たして「自然」なのでしょいか。村の中にも田畑を耕す人がいなくなつて、放棄された田畑が増えてきました。その横を通るときは「いやだな」と思います。無意識に目を背けてしまいます。しかし、その田んぼが藪くさぶになった場所にも、草は生えていて、よく見ると道端と同じ草も混ざつて咲いています。しかし、その藪の中の花には私のまなざしは向けられません。まなざしが向けられないところには自然はない、ということでしょうか。

若い頃には、都会の中にはちゃんとした自然はないと思っていました。たとえは悪いのですが、田舎の藪みみたいな、それも貧相な自然しかないだろうと、正直思っていました。ところが友人から「都会にも自然はあります。街路樹の根元に咲く野の花はいいものですよ」と言われて、驚おどろきました。それから、都会に行つて、街の中を歩くときは、道端の草に目をやるようになりました。田舎と同じ草もいっぱい生えています。

ですから、都会に住んでいる人も散歩のときや、通学・通勤の途中で、ふと道端の野の花に目をとめているのですね。そして名前を覚えたくないのでしょいね。もっとも、急いでいるときは、気づかないで通り過ぎてしまふのは、田舎でも都会でも同じです。自然とは、いったい何なのでしょいか。どうも「自然は大切だ。自然は破壊してはいけない」と言うときの自然とはちがう自然が身の回りには、あたりまえにあふれています。

これが私たちの日常です。でもなぜ、私たちはふと野の花に目をとめるのでしょいか。なぜ、意識せずにまなざしを向けるのでしょいか（それもかなり個人差があります）。

「きれいだと思うから」という返事が聞こえてくるようですが、そのでしょいか。もっと深い理由がありそうです。

村に住んでいると、ある日突然に、蛙かえるの鳴き声が村中に響き渡ります。六月上旬の夜のことです。百姓でない人は「夏が来たな」と感じるでしょい（私は「誰か田植えを始めたな」と思います）。蛙のほとんどは田んぼで産卵します。鳴いているのは雄の蛙で、求愛の声なのです。蛙は田んぼが産卵できる状態になるまで鳴かずに待っているのです（代掻しろかき・田植えが終わると、田んぼの水は温まり、干上がるのがなくなり、餌の藻類が一斉に発生し、卵からお玉杓子オタマジャクシが生まれ育つための条件が整うからです）。

しかし私たちは「代掻きと田植えが引き金になって、蛙が鳴き始めたんだな」と因果関係を意識することはなく、蛙が鳴き始めるのは毎年くり返される「自然な現象」であつて、「いよいよ本格的な夏が来た」と蛙の鳴く声という自然に季節を感じるのです。

赤とんぼが急に飛び始めるのは、田植えして四五日過ぎた頃です。日本で生まれる赤とんぼのほとんどは田んぼで生まれます。しかし、赤とんぼが群れ飛ぶ夏空や秋空は「自然な現象」であつて、この赤とんぼは

どこで生まれたのだろうか、と考えることはありません。まして、田植えをして四五日過ぎたから、そろそろ赤とんぼが飛び始める頃だ、などと待ちかまえることもありません。近年、東日本では赤とんぼ（秋茜）が激減しています。「少なくなっただ」と気づく人もいますが、「なぜ少なくなったのだろうか」と考える人は、百姓にもあまりいません。

どうも身近な自然というのは、ことさらに意識して、移ろいの原因を突きとめようとするようなものではありません。自然に、あるがままでいいのです。

夏の畑での百姓仕事は暑くて困ります。ところが田んぼでの仕事は涼しいのです。とくに稲の葉を揺らしてこちらに吹いてくる風に包まれると、ほんとうに身体の中を風が吹き抜けて行くような気がして、気持ちがいいものです。これは百姓なら実感として誰でも感じています。でも、なぜ田んぼの風は涼しいのか、と問うことはありません。「田んぼには水が溜まっているからじゃないの」とは思うでしょうが、「ではなぜ、水が溜まっていると涼しいのか」と問われると、「冷たい水のイメージがするから、涼しい感じがする」と答える人が多いのですが、夏の田んぼは稲が繁っていて、水は見えません。

田んぼと畑の気温を調査した研究によると、その差は平均すると2.5℃ぐらいだったそうです。「へえー、そんなに違うのか」とは思いますが、「なぜそんなにまで差が出るのか」と考えることはありません。

晴れた日の夏の夕暮れともなると、田んぼの稲のすべての葉先に、水滴が現れます。それが夕日に反射してきらきら輝いている風景はまるで星空を眺めているのかと錯覚するぐらいで、見とれてしまいます。しかし、昼間はさらに多量の水分が葉先から蒸散しますが、すぐに空気中に消えていくので、人間の目には見えません。夕方になると空気が水分を抱え込むことができなくなり、水滴として葉先に留まってしまうから見えるのです。

しかし、私たち百姓も「そうか、この水滴が昼間は蒸発して、風を冷やしているのか」などは考えません。こうした科学的な説明は、涼しい風に身をまかせている気持ちや稲の葉先の露を星空に見立てている感性を台なしにしてしまいます。無粋な、出過ぎた、無駄な説明だ、と感じるので。

このように私たちは四季折々の様々な自然に目をとめ、それを「自然な現象」として、満喫しています。生きものに目を向けることは気持ちのいいものです。しかし、その出現の原因を問い詰めたりはしません。そんな意識が持ち上がったら、自然は楽しむことができませぬ。自然は、自然のままに感じて身を任せて、離れるとすぐに忘れていくものです。それがいいのではないのでしょうか。

百姓は田畑で仕事をして、一服するときには木陰で休みますが、お茶を飲みながら、なぜか風景を眺めています。こういう時です。普段は仕事の対象としてしか見ない相手の稲や野菜や田んぼや田んぼの畦や里山が、風景として見えてきます。

もちろん百姓仕事の最中は、仕事の相手である土や水や作物や草や虫だけを見つめています。とくに仕事に没頭してしまうと、周囲のことはもちろんのこと、自分がそこにいることすら忘れていきます（この境地はとてもいいものです）。ところが仕事の手を休めると、一挙にまわりの世界が広がって見えてきます。こういう時です。「自然に包まれて仕事していたんだ」と気づくのです。そして、仕事の跡を振り返ります。仕事の出来ばえを確かめてしまいます。

次に田畑から出て、畦に腰を下ろして休憩するとき、必ずと言っていいほど、風景を眺めるのです。いや眺めるといっても向こうから目に飛び込んでくるのです。「そろそろ山の木々に新葉が出てきたな」と、自然の変化が目とまります。このように風景はまず、季節を告げてくれます。自然の移ろい、と言ってもいいでしょう。この時も、風景の美

しさは感じていないわけではありませんが、むしろほっとするのは、なぜなら、この風景は見慣れた（私にとって、ありふれた）ものから、美よりも安堵<sup>あんど</sup>というか、心地よいものなのです。

百姓ではなく室内で仕事をしている人も、仕事の手を休めるときには、窓の外の風景を眺めるのではないのでしょうか。無意識のうちに、目が自然に向いてしまうのです。これはどうしてでしょうか。

このように休み時間は、仕事の最中には没頭していた天地自然から抜け出て、自然を外から眺め始める時間になります。仕事の最中は内側から見ていた自然を、外側から見るができるようになるのです。まさに一挙に視野が広がるのですが、広がるのは視野だけではありません。これは旅行したときの感覚に似ています。

（宇根豊『日本人にとって自然とはなにか』より。出題の都合により一部文章を省略した箇所がある。）

（注） 百姓Ⅱ農業に従事する人

代掻きⅡ田に水を入れた状態で、土のかたまりをくたく作業

(一) <sup>A</sup> ありふれた のここでの意味として最も適切なものを、次の①～⑤から一つ選び、その数字を解答番号 6 にマークしなさい。

- ① 素朴ななかに、美しさがある。
- ② 数が多く、広く知られている。
- ③ 決まった場所に生息している。
- ④ どこにでもあり、普通である。
- ⑤ 古くからのもので由緒<sup>ゆいじょ</sup>がある。

(二) <sup>B</sup> 驚きました とあるが、なぜ驚いたのか。その理由として最も適切なものを、次の①～⑤から一つ選び、その数字を解答番号 7 にマークしなさい。

- ① 都会の自然は田舎の自然と違って貧相なのに、都会の人は街路樹の根元に咲く野の花を自然だととらえていたから。
- ② 都会にちゃんとした自然はないだろうと思っていたが、街の中にも自然はあり、それに目を向けている人がいたから。
- ③ 都会には田舎の藪のような自然しかないのに、それを自然だと思いつき、まなざしを向ける人がいたから。
- ④ 都会の自然と田舎の自然は違うと思っていたが、指摘を受けて、道端に咲く花の種類は同じだと気づいたから。
- ⑤ 都会の人の使う自然という言葉が田舎の人の実感とは違って、想像だけでものを言っているように感じたから。

- (三) <sup>C</sup> 私は「誰か田植えを始めたな」と思いますが、とあるが、ここから筆者がどのような視点をもっていることがわかるか。最も適切なものを、次の①～⑤から一つ選び、その数字を解答番号 8 にマークしなさい。
- ① 田畑で働き、百姓としての自分とそうでない自分の二面から季節をとらえる視点。
  - ② 長年田舎の村に住み、生態系から田んぼの水の温度の変化までも理解する視点。
  - ③ 田畑を仕事の場とし、自然や季節の変化よりも田畑自体の変化を重んじる視点。
  - ④ 長年田舎で暮らし、毎日身近な自然を観察して蛙の生態を学び続ける視点。
  - ⑤ 村で農業に携わり、代掻きと田植えが蛙の鳴き声と関係があると考えるような視点。

- (四) <sup>D</sup> 涼しい風に身をまかせている気持ちや稲の葉先の露を星空に見立てている感性とは、どのようなものか。その説明として最も適切なものを、次の①～⑤から一つ選び、その数字を解答番号 9 にマークしなさい。
- ① 涼しい風の心地よさや夕日に水滴が輝く風景の美しさをあたりまえのこととせず、それらのありがたみに思いをはせるもの。
  - ② 涼しい風を心地よく感じ、美しいものを見ると何か別のものに見立てたくなるのはなぜなのかということを考えるもの。
  - ③ 身体の中を吹き抜けるような風の心地よさや、おの自ずとうっとりするような風景の美しさをそのまま味わい楽しむもの。
  - ④ 身体の中を吹き抜ける風や、見とれてしまうほどの美しい風景で一日の畑仕事の疲れを癒し、明日への活力や希望がわくもの。
  - ⑤ 畑仕事の相手である土や水をはじめとする自然だけを見つめ、この仕事をしているものには感じ得ない親しみを味わうもの。
- (五) <sup>E</sup> 自然を外から眺め始める時間とは、たとえばどのような時間か。その例として最も適切なものを、次の①～⑤から一つ選び、その数字を解答番号 10 にマークしなさい。
- ① 散歩や通勤や通学の途中に、ふと道端の野の花に目をとめているような時間。
  - ② 代掻きと田植えが始まったから蛙が鳴き始めたのだ、と認識するような時間。
  - ③ 田植えから四五日頃ということ、赤とんぼが飛び始めることを結びつけるような時間。
  - ④ 田んぼにいて、畑との気温の差が出るのはなぜだろうと考えるような時間。
  - ⑤ 百姓仕事の相手である作物などをじっと見つめ、仕事に没頭しているような時間。

(六) 筆者は自然についてどのような考えをもっているか。その説明として最も適切なものを、次の①～⑤から一つ選び、その数字を解答番号 [11] にマークしなさい。

- ① 自然がなさそうな場所にも自然はあたりまえにありふれているので、私たちはそれらに目を向け、花の名前などの知識を増やしながらか、あるがままの自然を自由に楽しむべきだ。
- ② 私たちは身近な自然やその変化を意識しすぎる必要はないが、自然の移ろいや出現には原因があるということを知っておけば、自然に向き合ったときの視野を広げることができる。
- ③ 自然は日常にあたりまえにあふれているものなので、それらのさまざまな現象に原因を求めようとせず、向こうから飛び込んでくる自然に対してあるがままに触ればよい。
- ④ 仕事の合間に目に入ってくる自然は、私たちの視野を広げるほどの美しさをもっているため、私たちは仕事の手を休めるときには、積極的に自然を眺めることが大切である。
- ⑤ 人からのまなざしが向けられない自然はそこにはないものとされがちなので、私たちが四季折々の自然に目をとめるようにして、自然を大切にしながら共生していきたい。

(七) この文章を読んだ生徒たちが、文章中の「旅行したときの感覚に似ています」という言葉について次のような話し合いをしている。春男さんの [12] にあてはまる発言として最も適切なものを、後の①～⑤から一つ選び、その数字を解答番号 [12] にマークしなさい。

- 春男さん 旅行では、勉強や仕事から離れて刺激的な体験がたくさんできるので、それを「旅行したときの感覚」と言っているのではありませんか。
- 夏美さん 違う気がします。傍線部の少し前に「内側から見えていた自然を、外側から見ることができるようになる」とあり、その結果「視野が広がる」と筆者は言っていますね。「内側」は文章中で「仕事の最中」という意味ですが、旅行のときの「内側」が何か、まず考えたいです。
- 秋子さん 旅行のときは日常から離れるので、旅行のときの内側は、普段の生活を指すのではないのでしょうか。
- 春男さん 普段の生活を外から見ること、視野が広がるということですね。これはよくわかります。
- 秋子さん でも、「視野だけではありません」というのが、「旅行したときの感覚に似て」いるのですよね。視野が広がること以外に、どんなことが旅行によって得られるのでしょうか。
- 夏美さん 筆者が田畑から出て風景を眺めているところでは、そのときに得られる気持ちを書かれていますね。このような気持ちのこころではないのでしょうか。
- 春男さん [12]、ということですね。
- ① 普段の生活を離れることで感じる緊張感
  - ② 普段の忙しい生活を客観的に見る面白さ
  - ③ 普段の生活の面倒臭さから逃れた解放感
  - ④ 普段の生活と似たものを見つけた安堵感
  - ⑤ 普段の生活を外から見て感じる心地よさ



次のページに続きます。

次の文章を読み、各問いに答えなさい。

これまで、ことばとアイデンティティの関係は、あらかじめ話し手には自分のアイデンティティがあつて、そのアイデンティティが言葉づかいにも自然にあらわれると理解されていた。謙虚な人はいいいな言葉づかいをし、傲慢な人はおうへいな言葉づかいをする。ある人がいいいな言葉づかいをするのは、その人が謙虚な人だからだと考えられた。つまり、「私たちは、すでにあるアイデンティティにもとづいて人との関わり方を決めている」と考えられていたのだ。

このように、アイデンティティをその人にあらかじめ備わっている属性のようにとらえて、人はそれぞれの属性にもとづいてコミュニケーションをするという考え方を「本質主義」と呼ぶ。

たとえば、アイデンティティのうちで「ジェンダー」（女らしさや男らしさ）に関わる側面を本質主義にもとづいて表現すると、人は「女らしさ」や「男らしさ」を「持っていて」、その「女らしさ」や「男らしさ」にもとづいて、ことばを使うと理解される。ある人が女らしい言葉づかいをするのは、その人が女らしいからで、男らしい言葉づかいをするのは、その人が男らしいからだと言われた（ちなみに、本書では、「性別」ではなく「ジェンダー」を用いる。性別とは生物学的な性の違いを指し、ジェンダーは、社会文化的な女らしさや男らしさを指す）。

X、このような考え方では説明のつかないことがたくさん出てきてしまった。もっとも大きな問題は、私たちはだれでも、それぞれの状況に応じてさまざまに異なる言葉づかいをしていることがはっきりしてきた点である。同じ人でも、家庭での言葉づかいと学校での言葉づかいは異なる。同じ学校で話しているも、話す相手や、場所、目的によって異なる。Y、同じ人でも子どもの時と大人になってからでは言葉づかいが変わる。同じ「男らしさ」を持っている人でも、その言葉づかいはそれぞれに異なる。Z、いつでも、だれとでも、同じ言葉づかい

で話している方が不自然に感じられるのではないだろうか。もし、私たちが、すでにあるアイデンティティにもとづいて人との関わり方を決めているのだとしたら、このように言葉づかいが多様に変化することを説明できない。

そこで提案されたのが、アイデンティティをコミュニケーションの原因ではなく結果ととらえる考え方である。私たちは、あらかじめ備わっている「日本人・男・中学生」という属性にもとづいて言葉を選んでいくのではなく、人とのコミュニケーションによって自分のアイデンティティをつくり上げている。「私は日本人だ」「男として恥ずかしい」「もう中学生になった」などと言う行為が、その人をその時「日本人」「男」「中学生」として表現すると考えるのである。

アイデンティティを、その人が「持っている」属性とみなすのではなく、人と関わり合うことでつくりあげる、つまり、「アイデンティティする」行為の結果だとみなすのである。このように、アイデンティティを、他の人とはことばを使って関わり合うことでつくり続けるものだとみなす考え方を「構築主義」と呼ぶ。

構築主義によれば、人はあらかじめ「持っている」アイデンティティを表現しているのではなく、他の人と関わり合う中で、その時々に応じて、さまざまなアイデンティティを持った人間として立ち現れるのだ。本書では、構築主義の考え方にもとづいて、ことばとアイデンティティの関係を見ていく。

「構築主義」という考え方の特徴は、何よりも、私たちのアイデンティティは、他の人との関わり合いの中で表現されるのだと考える点だ。関わり合う相手は、人間でなくてもよい。ペットに話しかけるときには、自分でもびっくりするぐらい優しい自分になっている時がある。

しかし、ここまで読んできて、いくつかの疑問を持った読者がいると思う。

まず考えられる疑問は、他の人と関わり合うことで、その時々に応じたアイデンティティを表現するとしたら、人と関わり合う前の自分は空っぽなのかという問いだ。この、「自分は空っぽ」というのは、たいの人の感覚とずれている。むしろ私たちは、自分の中には何か自分らしさがあるという感覚を持っているのではないか。

これに対して、構築主義を提案した人たちは、次のように説明する。私たちは、繰り返し習慣的に特定のアイデンティティを表現し続けることで、そのアイデンティティが自分の「核」であるかのような幻想を持つ。

そう言われてみると、私たちが日常的に関わり合う人たちは、結構、似たような人であることが多い。毎日、新しい出会いがある人もいるかもしれないが、たいていは、家族やクラスメート、学校の先生など、同じような顔触れなのではないだろうか。だとすると、私たちは、日常生活で関わる人に対して、かなり長い期間、繰り返し、同じような自分を表現していることになる。そして、それが「自分らしさ」を形成していると感ずるようになっていくとしても、不思議ではない。

哲学者のジュディス・バトラは、ジェンダーに関わるアイデンティティについて、「ジェンダーとは、身体をくりかえし様式化していくことであり、きわめて厳密な規制的枠組みのなかでくりかえされる一連の行為であって、その行為は、長い年月のあいだに凝固して、実体とか自然な存在という見せかけを生み出していく」と指摘している。

つまり、女らしさや男らしさに関わるアイデンティティの側面も、身近な人との関わり合いの中で、長い間繰り返し表現していくことで、「自分の女らしさ、あるいは、男らしさはこんな感じ」という感覚が確立していくというのだ。

もうひとつ考えられる疑問は、私たちは、その時々に応じて、さまざまなアイデンティティを持った人間として立ち現れるとしたら、自分の

アイデンティティは複数あるのかという問いだ。これは、「アイデンティティ」をどのように理解するかという難しい問題をはらんでいる。しかし、アイデンティティをひとつに限る必要はないと考える人はいる。

たとえば、作家の平野啓一郎は、『私とは何か』（二〇一三）の中で、「個人」ではなく「分人」という考え方を提案している。この本によると、たったひとつの「本当の自分」など存在しない。むしろ、対人関係ごとに見せる複数の顔が、すべて「本当の自分」である。

「分人」という考え方の素晴らしいところは、たとえ、Aさんとの関係で見せている自分は好きでなくても、Bさんとの関係で見せている自分を支えにしていけると示している点だ。学校でいじめられて苦しんでいる自分がすべてではなく、家に帰って家族から愛されている自分を認めることで生きていける。

このように、複数のアイデンティティを表現することは、後期近代の特徴だという人もいる。そう言われてみると、以前の日本企業は、終身雇用が売りだった。一度就職すれば、退職するまで同じ会社で働く。自分のアイデンティティは、昇進などで変わるぐらいで、基本的には、会社の限られた人間関係にもとづいていた。へたをすると、「会社」が、その人のアイデンティティになる場合も多かった。

ところが今は、ひとつの会社に就職しても、転職する人もいる。同じ会社で働く人も、正社員から派遣社員、嘱託やアルバイト、それに加えて転職組など、あらゆる立場の人たちが一緒だ。会社の上下関係以外にもとづいて接しては、仕事が動かない。それぞれの立場の人が、他の立場の人と、アイデンティティを調整しながら関係を築いていかなければならない。現代人が生きる人間関係はより複雑になり、結果として、場面ごとに異なる複数のアイデンティティを生きる必要が発生したのだ。

（中村桃子『「自分らしさ」と日本語』より。出題の都合により一部文章を省略した箇所がある。）

(注) アイデンティティⅡ私がどのような人なのかというイメージのようなもの  
様式化Ⅱあるパターン(型)にあてはめること  
嘱託Ⅱ一定の業務を正規の職員や社員以外の人に頼み、任せる制度

- (一) <sup>A</sup> アイデンティティが言葉づかいにも自然にあらわれる とあるが、これはどういうことを意味しているか。その説明として最も適切なものを、次の①～⑤から一つ選び、その数字を解答番号  にマークしなさい。
- ① あらかじめ持つ属性にもとづいてコミュニケーションをしているということ。
  - ② 相手の属性が明らかになってからコミュニケーションを開始するということ。
  - ③ コミュニケーションをするうちに自分の属性が引き出されてくるということ。
  - ④ コミュニケーションの結果として自分の属性が明らかになるのだということ。
  - ⑤ 自分の属性に逆らわないような形でコミュニケーションを始めるということ。

- (二)   にあてはまる言葉の組み合わせとして最も適切なものを、次の①～⑤から一つ選び、その数字を解答番号  にマークしなさい。
- |   |   |      |   |     |   |     |
|---|---|------|---|-----|---|-----|
| ① | X | だから  | Y | そして | Z | さらに |
| ② | X | しかし  | Y | さらに | Z | むしろ |
| ③ | X | だから  | Y | つまり | Z | そして |
| ④ | X | しかし  | Y | むしろ | Z | つまり |
| ⑤ | X | けれども | Y | しかも | Z | だから |

(三) B

- アイデンティティをコミュニケーションの原因ではなく結果ととらえるとは、どのような考えか。その説明として最も適切なものを、次の①～⑤から一つ選び、その数字を解答番号 15 にマークしなさい。
- ① 自分にあらかじめ備わっているアイデンティティが、他の人との関わりによって自覚できるものとなり、コミュニケーションを通じて表現されていくという考え方。
  - ② 自分の中に複数あるアイデンティティにもとづいて人と関わり、さまざまな相手や目的に応じる中で、一つの確固たるアイデンティティがつくられるという考え方。
  - ③ すでに属性として持っているアイデンティティと他人との関係において立ち現れるアイデンティティがあり、個人の判断によってどちらかが選ばれるという考え方。
  - ④ アイデンティティとは、あらかじめ持っているものが表現されるのではなく、他の人との関わりの中で、自己の中から自分らしさとして見つけ出されるという考え方。
  - ⑤ アイデンティティは、あらかじめ備わっているものではなく、他の人との関わり合いの中で、アイデンティティを持つ人間として立ち現れるというものだという考え方。

(四) C

- これが指し示す内容として最も適切なものを、次の①～⑤から一つ選び、その数字を解答番号 16 にマークしなさい。
- ① 他者との関わり合いというのは、人間だけではなくペットでもよいのだろうかという疑問。
  - ② アイデンティティが、他の人との関わり合いの中で表現されるとはどういうことかという疑問。
  - ③ 他の人と関わり合う前から、自分の中には何か自分らしさがあるのではないかという疑問。
  - ④ 私たちは、自分の中には何か自分らしさがあるという感覚を持っているのだろうかという疑問。
  - ⑤ 「自分は空っぽ」と考えるのは、たいていの人はしないような考え方ではないかという疑問。

(五) 次の文章は、平野啓一郎『私とは何か』からの引用である。「分人」という考え方を踏まえて、 にあてはまる内容として最も適切なものを、後の①～⑤から一つ選び、その数字を解答番号17にマークしなさい。

あなたと接する相手の分人は、あなたの存在によって生じたものである。

相手が、あなたとの分人を生きて幸福そうであるなら、あなたは、半分は自分のお陰だと自信を持つことが出来るし、不幸そうなら、半分は自分のせいかもしれないと考えるだろう。高校時代の友達が、大学で見違えるほど快活になっているのを目にして、「あれは本当の姿じゃない！」などと揶揄するヒマがあるなら、 べきではあるまいか。

(注) 揶揄する＝馬鹿にする

- ① どうすれば彼が大学で幸福に過ごし続けることができるのかを考えて、行動に移す
- ② どうすれば自分も大学生として本当の姿を素直にさらけ出すことができるかを、考える
- ③ どうして自分は彼の快活さを高校時代に見いだすことができなかつたのかを、反省する
- ④ どうして彼は高校ではあんなふうに過ごせなかつたのかと、自分たちの接し方を省みる
- ⑤ どうして人というものが成長とともに、見た目や性格が変わるのかとよく考えてみる

(六) この文章の論の展開についての説明として最も適切なものを、次の①～⑤から一つ選び、その数字を解答番号18にマークしなさい。

- ① 冒頭でアイデンティティについて定義し、従来の考え方と新たな考え方を紹介し、それぞれの考え方の長所と短所を具体例を挙げながら対比して、新たな考え方の妥当性を示している。

- ② ことばとアイデンティティの関係についての従来の考え方が、時代の変化とともに変わってきていることを具体的な矛盾点を挙げながら説明し、今後の展望を具体的に予見して結論づけている。

- ③ アイデンティティについてのこれまでのとらえ方を紹介したうえで、近年その考え方がどのように変化しているかについての筆者の考えを、哲学者と作家の二人の意見を対比させることでまとめている。

- ④ ことばとアイデンティティの関係について、従来の考え方の問題を指摘したうえで新たな考え方を示し、読者が抱くであろう疑問を取り上げて、その疑問を解消しながら考えをまとめている。

- ⑤ ことばとアイデンティティの関係について、序論として旧来の考え方を示し、本論として現在の主流となっている考え方を示し、結論として今後の主流となるであろう考え方を示している。

四

次の文章は、鎌倉時代の説話集『十訓抄』の一部である。これを読み、各問いに答えなさい。

ある人はいく、人は慮りなく、いふまじきことを口疾くいひ出し、  
(へらへらとしやべり)

A 人の短きをそしり、したることを難じ、隠すことを顕し、恥ぢがましき

ことをただす。これらすべて、あるまじきわざなり。われはなにとなく  
(問いただす)

いひ散らして、思ひもいれざるほどに、いはるる人、思ひつめて、いき

どほり深くなりぬれば、はからざるに、恥をもあたへられ、身果つるほ  
(思いもかけず)

(我が身がほろぶ)

どの大事にも及ぶなり。笑みの中の剣は、さらでだにもおそるべきもの  
(そつてなくてさえ)

ぞかし。心得ぬことを悪しざまに難じつれば、かへりて身の不覚あらは  
(よくはわかっていないこと)

(我が身のあやまり)

るものなり。

X おほかた、口軽き者になりたれば、それがしに、そのことな聞かせそ。  
(大体において)

D かの者にな見せそなどいひて、人に心をおかれ、隔てらるる、くちをし  
(警戒される)

かるべし。また、人のつつむことの、おのづからもれ聞えたるにつけて  
(つつみ隠していること)

も、「かれ離れじ」など疑はれむ、面目なかるべし。  
(あの人が関係していないわけではない)

しかれば、かたがた人の上をつつむべし。多言留むべきなり。  
(あれこれ人の身の上のことは気をつけるべきだ)

A (一) 人の短きをそしり の現代語訳として最も適切なものを、次の①～

⑤から一つ選び、その数字を解答番号 19 にマークしなさい。

- ① 人の短所が気になり、いらぬ世話を焼き
- ② 人が短気であることに、腹を立てて
- ③ 人の短所をけなしたり、悪く言ったりし
- ④ 人が短気で、かつとなりやすいと知り
- ⑤ 人の短所がわかるような、得意げな顔をして

B (二) いきどほり深くなりぬれば とあるが、このようなことが生じるのは

なぜか。その理由として最も適切なものを、次の①～⑤から一つ選び、その数字を解答番号 20 にマークしなさい。

- ① 話している側が気をつけていても、言われた側の知らないところで話が脚色されて誤解が生まれる恐れがあるから。
- ② 話している側が無意識に言ったことでも、言われた人を周りの人間がどのように評価するかは予想がつかないから。
- ③ 話している側はよかれと思って言ったつもりでも、言われた側は遠回しに自慢しているようで恥ずかしいから。
- ④ 話している側は何となく言ったつもりでも、言われた側は知られたり言われたりするのがづらいこともあるから。
- ⑤ 話している側が善意に見せかけて、言われた側に嫌な思いをさせることを意図して発言したことであるから。

(三) 笑みの中の剣 とあるが、これはどういうことを意味しているか。その説明として最も適切なものを、次の①～⑤から一つ選び、その数字を解答番号 21 にマークしなさい。

- ① うわべでは笑っていないながら、心の中は悪意に満ちているということ。
- ② 人から笑いものにされて、内心は怒りが爆発しそうであるということ。
- ③ へらへらと笑っている人は、自分の信念がしっかりしているということ。
- ④ 普段笑顔でいることで、あえて周りの人を油断させているということ。
- ⑤ 笑って話を聞き流しているような人でも、噂には熱心であるということ。

(四) <sup>D</sup>な見せ方は会話文の終わりである。この会話文の始まりは、古文中のXのどこか。この会話文の始まりの四字として最も適切なものを、次の①～⑤から一つ選び、その数字を解答番号 22 にマークしなさい。

- ① おほかた
- ② 口軽き者
- ③ それがし
- ④ そのこと
- ⑤ かの者に

(五) この文章を読んだ生徒たちが次のような話し合いをしている。本文の内容に合う発言をした人の名前として最も適切なものを、後の①～⑤から一つ選び、その数字を解答番号 23 にマークしなさい。

なおおさん 「目は口ほどにものを言う」という言葉があるように、思っていることは目にも表れるから気をつける必要があるということ。何を伝えなかったのではないのでしょうか。

はるとさん 「口から先に生まれた」という言葉もありますよ。この話では、おしゃべりな人や口の達者な人が、周りの人から妬まれるので、おしゃべりはしないほうがよいと忠告しているのではないのでしょうか。

ふゆみさん 相手から話された場合のことも考えてみましょう。「口車に乗る」という言葉もあります。この話では、うまい話に丸め込まれないように注意しなければならぬという教訓が含まれているのではないのでしょうか。

あすかさん 「口は禍のもと」という言葉がこの話には合うのではないのでしょうか。不用意な発言や言い過ぎは災難を招くことになるので、それを戒めているのだと思います。

みきおさん 私は発言だけに限ったことではないと思います。「見ざる言わざる聞かざる」という言葉のように、言おうとしないだけでなく、見ることも聞くことも避けたほうが無難だということ。何を伝えられているのだと思います。

- ① なおおさん
- ② はるとさん
- ③ ふゆみさん
- ④ あすかさん
- ⑤ みきおさん



## 五

次の①～④は、川添愛『くだん使いの言語学』の一部である。これらの文章を正しい順に並べ替えるとき、二番目と三番目にあたるのはそれぞれどれか。その数字を、二番目にあたるものは解答番号 24 に、三番目にあたるものは解答番号 25 にマークしなさい。なお、※は次の①～④を並べ替えた後に続く文章である。

① また、「仲間内での事前の取り決め」と言えば狭い感じがするが、これを「社会人コミュニティの中の共通の理解」と考えると、私たちはより頻繁に合言葉的な表現を使っていると言えそうだ。たとえば、あまり真剣にやる気がないことをやんわり伝える「善処します」だとか、本気で思っているわけではない「今度うちに遊びに来てください」などといった社交辞令の一部も、ある意味「社会人だったら真意が分かること」が期待される、合言葉的な言い回し」だと言えるかもしれない。

② 言外の意味にもさまざまなものがある。たとえば合言葉は、「仲間内での事前の取り決め」に従って、言葉の本来の意味とは関係のない意図を伝えられるようにしたものだ。時代劇などでおなじみの合言葉「山」「川」は「お前は仲間か?」「そうだ」ということを伝えるが、ここで伝えられる内容と、「山」「川」そのものの意味との間には直接的な関係はない。

③ 言外の意味を理解するのは難しいと言われるが、中には、私たちの日常に馴染みすぎているがゆえに、言外の意味だということがほとんど意識されないものもある。そういったものの一つに、言語学で「会話的含み (conversational implicature)」と呼ばれるものがある。これは、「なぜ話し手は、今この文脈で、あえてこのようなことを言ったのだろう」という推測から生じる言外の意味だ。

④ 「行間を読む」とか「空気を読む」という言葉に表されているように、日常生活の中では、言葉に直接表れていない相手の意図を汲み取る必要性がたびたび出てくる。いわゆる「言外の意味」というものだ。

※ 私たちは言外の意味を理解するとき、「言葉が文字通りに表す内容」だけでなく、「仲間 (コミュニティ) 内での取り決め」や、「言葉が発せられた文脈」などを手がかりに、高度な推測を行っている。合言葉的な表現にしろ、会話的含みにしろ、言外の意味が相手にきちんと伝わるためには、「これは文字通りの意味で受け取ってはいけないんだな」ということが相手に伝わらなくてはならない。これは人間どうしでもうまくいかないことがあるし、言葉を操る人工知能 (AI) にとってもかなりの難問でもある。





